



歴史資料館だより

発行者
聖隷歴史資料館

〒四三三-1855
浜松市北区三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学五号館一階
TEL 〇五三(四三九)三四〇七
FAX 〇五三(四三六)五三五五

◆聖隷歴史資料館
開館時間のご案内◆
平日(月～金)の10時～17時
(土・日・祝日と
聖隷学園の休日は休館)

第9回聖隷グループ キリスト教信徒交流会

テーマ「神と隣人に仕える
わたしの喜び」

2018年度の信徒交流会は10月13日に開催されました。聖隷歴史資料館が主催し、今年是小羊学園が幹事法人として会を運営、聖隷グループの八つの法人から80名が参加しました。遠州教会石井牧師の開会礼拝に続き、聖隷学園長谷川理事長から信徒交流会の趣旨について次のような説明がありました。

信徒交流会は歴史資料館発案で始まり今年も9回目を迎えました。キリスト教徒の割合と働きに、法人それぞれで差がある聖隷グループのなかで、教派を越えてキリスト教に関わりのある方が年に一度集まって交流し、それぞれの頑張っている姿を見て励まし合う。さらに8つの法人が連帯をし、連携することによって、できるかぎり聖隷の先輩たちがつくった、苦しく困難な状況にある人を助ける、助けざるを得ないほどの信仰の質をもって行動する。その信仰を受け継ぎ、それをより強く確かなものにしていきたい。そのためにこの会を開催しています。

主題講演 「小羊学園ではたらく喜び」

社会福祉法人小羊学園 理事長 稲松義人



40年前に浜松に来て小羊学園に就職し、児童指導員として障害のある子どもたちの生活のお世話を担当しました。若い頃、楽しみながら働いていたことが思い出されます。その後、学齢期を過ぎると、作業ができる人たちをひのきグループ、ひのき舞台です

ね、ちよつと頑張れば作業ができるかもしれない人たちをあすなろグループ、作業は無理だろうという人たちをかしのきグループと名付け、私はかしのきグループの担当でした。午前と午後の活動では、散歩をする、畑に行つてのんびりする、音楽を聴く、そんなことをやっていました。当時は私も利用者の人たちも若かったので、雨が降らない限り、暑い日も寒い日も、

たいていは一人で5人を連れて散歩に出かけました。言葉のない人たちのなかで話相手になりません。景気づけに歌を歌いながら歩く。その時に作つたのがこの曲です。
♪小羊学園に春が来る

「冷たい風が吹いている／それでも元気に歩こうよ／大きな空を見上げてごらん／おひさまはいつも見ているよ／小羊学園にもうすぐ春が来る 葉のない枝はさびしいね／それでも確かに生きています／僕らもいつか若木のように／おひさまを指して伸びていこう／小羊学園にもうすぐ春が来る」

5年目の私と一緒にグループを担当していた保育士さんが2人いました。そのうちの1人は1年目の女性でした。かしのきグループのメンバーには、最近「強度行動障害」と言われる障害像の人がおり、不安定になると、器物を蹴飛ばしたり、ひっかかりたりがみついたり、いろんな行動をする。そのような彼らの行動を受け止めながら仕事をするわけですが、若い

新卒の女性には本当に過酷な仕事だったと思います。

明け方ひとりの利用者さんが不安定になってガラスを割る、何枚も割るので一人では対応できない。片方の建物の夜勤は渡辺さんという男性でした。そこで声を振り絞って「渡辺さん、助けてーっ」と叫んだのですが届かず、学園のそばを流れる川辺を早朝に散歩していた十字の園の園長綿鍋義典さん(後に十字の園理事長)が何事かと思つて覗いてくださったという笑い話がありました。それでも若い人たちは楽しんで仕事をしていたのでないかと思えます。

そういう人たちがやがて退職していく、今では長く勤めてくださる方が増えましたが、当時、女性の職員は二十代半ばになると、結婚やその他の事情で退職していく人が多かったのです。一緒に働いた保育士さんの結婚式に招待されたときに、同僚として余興に作つたのが次の歌です。小羊学園の子どもたちは言葉がない人が多いので、はなむけの言葉を言うということはありませんが、ひよつとするとこんなふうに思っているのではな

いかと思つて作った曲です。
♪子どもたちからのほなむけ

「小さな肩に重荷背負いながら／生きてきた子らの悲しみ見つめてきた／そばにいるだけで何の力にもなれない／自分の貧しさを思い知らされてきた／でも君には見えなくて／子どもたちのやさしい笑顔が／でも君には聞こえるでしょう／小さな命の歌が／きつとそれが、子どもたちの君へのはなむけ／きつとそれが、こどもたちの君へのおめでとつ(二節省略)」

この歌のエピソードは山浦俊治先生(当時小羊学園園長、後に理事長)が「子どもたちは恩師」という題で2冊目の著書(「この子らからの贈り物」)に書いてくださったっています。この結婚式に同じ利用者さんが1人招待されたのです。高校の同級生同士の結婚でしたので、恩師が新郎側の主賓の席にいて小羊学園側はその恩師と同じところに。「すごい席にケイ子ちゃんが入座しているね」と山浦先生。「我々にしてみれば子どもたちは恩師みたいなものかもしれませんね」と私が口走ったものですからそれが山浦先生の文章になったと思います。

いろんな利用者さんに出会いますが、彼らの生活に寄り添う中で様々なことを教えられました。その時には苦労がありますけれどもそこで命に向き合うことの楽しさを感じましたし、やりがいも感じ

てきた。ひよつとすると小羊学園の職員をいけばん育てているのは利用者さん自身ではないかと思えます。相談員をしている雨宮さん(浜松市障がい者基幹相談支援センター所長)が「地域で相談を受けているといろんな人に出会いますが、小羊学園で出会った人たちのことを思うとどんな人が来ても驚かないし、何とか受けてみようと思う」と話してくれまます。そうやって私たちは現場の中で育てられたと思えますし、重い障がいを持った人と出会うことで自分が今あるということ喜びに感じてきたと思つたのです。

その後わたしは法人本部に行きましたが、毎日接することもたがいないのでさびしいわけです。ある時法人内の施設が合同の運動会をしようということになりました。実際には雨でできなかったのですが、その時に作ったのが、「ともだち広場(歌詞省略)」です。



小羊学園では他でなかなか受けられないような人たちを受け入れて一生懸命やっています。それが小羊学園の仕事だとずっと言

い続けてきました。もちろん一匹の小羊の話は教会に行っている人なら聖書の話として知っているわけですが、そうでない人たちにもその話はしますので精一杯大変な人たちを受け続けてくれたと思えます。時には自分たちの力以上のことをして失敗したこともないわけではないですが小羊学園の仕事はそういう仕事だと思っています。

でも小羊学園の中で落ち着いて生活ができればそれでいいかと言うと、今の時代はそうではなく、できれば地域の中で生活ができるようにという時代です。そういう意味では「ともだち広場」ではないですけれどもいろんな人たちがそういう人たちに出会って何かを感じて、友だちになってほしいと思います。社会の中で生活していると色々疲れることもあるのではないのでしょうか。小羊学園に来るとほつとするといい感想を言ってくれるボランティアの人たちがいます。小羊学園で出会った彼らに、そこに神様からいただいた賜物があると思えますし、それを分かち合いたいと思います。

小羊学園も地域の仕事をやるようになって、通所施設、在宅の人たちのショートステイ、相談所で相談を受けるなど地域に広がりをもっています。これまでは聖隷グループもそれぞれのところで頑張っているということだったので少しは残念ですが、今後は実質的な

ところで連携をしながら一地域へ伝えていくということができればと思います。最初に入所した人たちは、もう小羊学園の中で高齢者になっています。あとは十字の園に託すしかないという話も出ますし、実習に來られる学生さんやボランティアに來られる人たちに社会での働き人になってもらうという意味では昔から聖隷学園の仕事とはつながりがあります。

小羊学園で仕事をしながら自分の楽しみのために作りたいくつかの歌を聴いていただきました。今日は聖隷グループの信徒交流会なので「聖隷」の名前のついた曲、「聖隷と呼ばれたこの街を」を用意してきました。私は40年前にここに來て教会に行きました。長谷川保さんは知っていました。長谷川接点があります。長谷川家のお付き合いはお孫さんから入っています。教会学校にはお孫さんがたくさん来ていました。そのお孫さんたちが成長して大学生になり、だんだん育っていくんですね。時代とともに「聖隷」がきれいな街並みになっていく。でも先輩たちが大切にしてきた目に見えないことを大切にしたいと思いがら作った歌です。

♪聖隷と呼ばれたこの街を

(前省略) いろいろついても忘れないうでおくれ／聖隷と呼ばれたこの街を／聖隷と呼ばれたこの街を」ありがとうございました。



第9回聖隷グループ信徒交流会のテーマ「神と隣人に仕えるわたしの喜び」に沿って、各法人からの近況報告に続いて、法人で働くクリスチャンから「わたしの喜び」と題してスピーチが行われました。発表順にその要旨を掲載します。法人の近況については9ページをご覧ください。

小羊学園

アグネス静岡 佐野公一



私は重症心身障害児者施設つばさ静岡に併設の相談支援事業所で相談支援専門員をしています。つばさ静岡は2005年10月に開所し私は翌年3月より勤め、現在施設は14年目、私は13年目になります。小羊学園との出会いは私が家族で受洗した日本キリスト教団清水教会の当時の三浦牧師が、つばさ静岡ができることを教えてくれたところから始まっています。2003年に勤めていた会社が倒産し、再就職は福祉の仕事我希望し高齢者の施設に勤めていたころでした。以前から、教会の図書

室に山浦先生の『この子らは光榮を異にす』ほか3冊の著書があり読んだことがありました。利用者さん一人ひとりに向き合い寄り添う、こんなところで働けたらいいな、と思っていました。キリスト教主義であるところも魅力でした。運よくつばさ静岡に入職でき、つばさ静岡では入所の生活支援員として6年、その後、生活介護に異動しサービスマニエールを3年、アグネス静岡に異動し相談支援に携わって4年目になります。

在宅重症心身障害児者にとつて、つばさ静岡という施設が存在が希望であること、入所支援だけではなく在宅を支える貴重な資源であることを改めて感じているところと、そんな利用者さんに支えられ大変なことも乗り越えることができてきました。相談支援は大変だけどもやりがいは感じています。相談者との出会いは何か感じるものがあります。今後もたくさんこなすことより、感謝の気持ちをもって、丁寧さを大事にしていきたいと思っています。

「わたしの喜び」というテーマを与えられています。喜びというより悲しいできごとが最近続いています。今年7月に入所者を見送りました。今年2月、5月から8月まで毎月、今年になって5人の利用者さんを見送っています。あまりに続くので体調が悪くなるほどでした。

7月の入所者を見送った時のこととです。お母様が通夜の時、わざわざ寄ってきて声を掛けてくれました。病院から入所してきた当時、なかなか施設のやり方に家族は馴染めなかったこと、看護師の言葉に傷つき、お母様の気持ちが落ち込んだことなどをモニタリングのたびに聞かせてもらっていました。それに対して私自身何かできていたわけではありませんでした。話を聞いてくれてありがとうという感謝の言葉をいただきました。感謝の言葉を伝えてくれたことが、悲しい出来事だったが、自分が行なってきたことがすこしでも無駄にはならなかったことは嬉しいう出来事でした。重症心身障害児者の皆さんから教えていただくことの多さに感謝するばかりです。これからも、重症心身障害児者と関わられることはわたしの喜びだと思っています。



プログラム「みんなで賛美しよう」では、小羊学園役員・スタッフと遠州栄光教会員を中心、「小さな羊が」を賛美しました。

神戸聖隷福祉事業団

理事 種谷啓太



1976年に社会に奉仕するクリスチャンとして、日本キリスト教団西神戸教会のクリスチャン4世帯、3人の単身者が神戸での職を辞して集団移住し、障がいある方々の施設運営に携わりました。そこには不安もあつたでしょう。大きな喜びもあつたと思います。永年就職、年功序列の時代にはおおよそクレージーなことと思えます。イエスに病気を癒してもらったために、屋根を取っ払い、縄でつり下げるようなことではないでしょうか。喜びをもって夢を目指されていたと心より思います。

そのようなことはつゆ知らず私はこの法人に職を得ました。私がこの法人に就職したときに初めて就いた職場の制服がケイシーでした。今はPT（理学療法士）さんなどが着ているあの服を着て仕事をしています。利用者さんに付いて外出する時もあの服でした。なんか変な喜びがありました。コスパレとか女装趣味の方とかにはそういう喜びがあるのでしょうか。



人に違った服装を見せる喜び、あれから私はちよつと変になりました。まあちよつとネガティブな喜びです。

私は一番初めに就いた職場で障がいのある方と接してまいりました。私は人と接するのが苦手、あまり得意じゃなかったのですが、人を介護する、支援するという仕事に就いたことで人との接点のバーが下がりました。これはひどい虐待です。相手のことを見下している。ただそのことが自分の優位性のなかの喜びに変わりました。いまここでこんな話をするの施設長さんや理事長さんたちに殴られそうですが、事実そうでした。接点のバーが下がった、そのことが逆に自分が接点を下げて行くことを覚えさせてもらったのではないかと思います。人間関係の優位性のなかの喜びというのは何かへんですが、本当にそういうふうに感じました。

これまではサービスを提供する側でしたけれども、もう少ししたら、ここにはご先輩がたくさんおられますが、サービスを受ける側になる、そのときにどうなるか。とても心配です。将来に向かって介護・支援を受ける側になるという心配、これも喜びですね。何故かわくわくはしないのですけれどもどうなるんだらうなあという喜びがあります。

十字の園

御殿場十字の園 高木直也



神と隣人に仕える私の喜びを忘れないエピソード、

主の御名をほめたたえます。思いがけずこのような場が与えられて、驚きではありましたが当法人に就職し、福祉の道に入って14年間のあいだ理事長をはじめ、多くの諸先輩方、周りの同僚、利用者さんや家族に支えられて今日まで来られたことを心から感謝し、喜びを分かち合いたいと思います。

私が就職して最初に遭わされた場所は特別養護老人ホームでした。初めて経験する事ばかりで戸惑うことも多かったのですが、その中でも忘れられないエピソードがあります。その頃は認知症の利用者さんが多くいるユニットのリーダーをしておりました。毎日毎日充実しておりましたが、利用者さんの事だけではなく、ユニットを率いていく上での悩みがあり疲れ切っていました。

そんな時夜勤の休み時間中、冬の寒いときであったと思いますが、私はうっかり廊下のソファで倒れ

込むように寝入ってしまった。私が目を覚ますと体に毛布が掛けられておりました。誰かが自分に毛布を掛けてくれたんだらうかとふと見ると、ある利用者さんの名前がついており、その利用者さんが私に毛布を掛けてくださったとすぐにわかりました。ただそのことがうれしくて朝になってその方にお礼をしに行くとその方には「ここにこして「風邪引くといけないからね」と言ってくださいました。その方は今はすでに亡くなられておりますが、私にしてくださいましたことは今でも心の中に生き続けており、体や心まで暖まるだけではなく時々思い出してはとも励まされております。

「夕暮れになっても光がある」という聖句があります。この言葉は十字の園で法人の聖句として掲げている言葉ですが、小さな出来事かもしれないがこの毛布の出来事を通して、ぐっとこの言葉が近づいてきました。たとえ高齢期になつたとしても、お一人お一人の中には素晴らしい光があるということ。その光がしが出来るところにこの仕事の喜びがあると思います。

大変な出来事に見舞われ倒れそうになるときもありますが、時折利用者さんの所に行つて細かくまでは言わないまでも、悩みを打ち明けますと、とても短い言葉だけでも的確で重みのあるアドバイスを、

しかも優しく語つて下さり、最後にそつとしわしわの手で頭をなでて「あんたも頑張んな」と言つて励ましてくださるのです。そうやって介護する人、される人という関係を超えて私は多くのものを頂いております。これが、神と隣人に仕える私の喜びの一つであり、神様から与えられた贈り物だと思っています。

牧ノ原やまばと学園

生活支援センターやまばと 田平智子



今回理事長よりお話しを頂き、テーマをお聞きした時、すぐさまお断り申し上げました。なぜなら現在の私は、また生活支援センターの職員たちにはご利用者とゆつくり交わりを通して感じる喜びよりも苦しみのほうが多いからです。ご本人、ご家族や事業所職員の悩みに心を砕き、疲れて帰ってきた後に溜まっていく記録業務量の多さのため息をもらし、常に計画相談における経営上の課題を問われ、年度末には職員の進退や異動も含め、先が見えない不安や憂いがつきまとう事が続いている



中、「喜び」のお話しをすることなど到底できません。そこで、お断りしてよいですか？と理事長にお伝えしました。

そんな私がなぜ、この場に立っているかという、理事長から説得されたからです。「恵みならあるのでは？」「希望ならあるのでは？」その問いかけに対し、1か月間考えていました。しかし今の私には恵みや希望を感じるセンターが弱っているのか、結局、最後は神様に向かって「何を語れと言われるのですか。私には今希望の光が見えません。語れというならばどうぞあなたが語ってください。また支援センターややまばとの職員の見え方を聞き入れどうか助けてください」と祈ることしかできませんでした。

信仰によって深い喜びに至った経験としては、義理の母との同居生活と最後の3年間の介護と死に携わったことによるものでした。私は18年前に結婚し、五島列島の隠れキリスタンの子孫で、長崎で被爆して体の弱い義母との3人暮らしが始まりました。やがて義母の認知が緩やかに低下していき、脳梗塞で入院。入院先から桜の満開の日に念願の帰宅を果たすことができた4日後、家族に囲まれて静かに息を引き取りました。義母の死後、母との思い出と共に、与えられる静かで深い復活の喜びは、受難の苦しみと自分の罪に死ぬこ

とによってしか味わうことができないという真理に気付かせていただきました。

そんなことをこの1か月の間に思い出しながら、では果たしてやまばとに今の私は希望を、また喜びを見出せるのか。改めて3年前に新人研修の時にいただいたシリーズ「福祉に生きる」の長沢理事長が書かれた長沢巖先生の生きざまを再度読み返してみました。

そこには巖先生が当時牧ノ原やまばと学園設立前から施設民主主義、つまり職員会議で各職員それぞれ自由に意見を言い合い、聞き合うことを大切に、多数決ではなく、徹底的に議論をして平和的に全員一致を目指す会議のあり方をとっていたこと。また夫、巖先生の人生を振り返った長沢理事長の「長沢が重い障がいを負い、やまばとの仕事を中断せざるを得なくなったことは、誠に残念です。しかし彼は、無力の状態の中でも多くの人に愛され、大切にケアされてきました、このような幸いが、生まれつき重い障がいを負い、それゆえ何の働きもなしえない人々にも、十分与えられるように、彼は祈っているに違いありません」という言葉に、改めて、やまばとの本来あるべき姿や存続のためのヒントや希望が隠されているような気がしました。

希望を持って就職し、利用者のことを思い、心と体を尽くして働

いている介護職員や支援員、相談員が、希望を失わずにやまばとの精神を愛し、安心して働き続けることができましように。現場の職員の力に信頼し、やまばとの未来を語り合い、アイデアを出し合い、最終的に職員全員が納得いくまで話し合い決定されたことに対してはみんな協力して行う体制がつくれるのであれば、必ず現実の様々な不足や不安、苦しみをも共に乗り越えようとする力や希望も与えられ、5年後、10年後にはそれは必ず深い喜びに変わる瞬間がくることを、私は願い祈りながら働かせていただこうと思います。

聖隷学園

中・高等学校総務部

高橋直史



私に通っている教会は、聖隷学園の真向かいにある遠州栄光教会です。以前大学に勤めていたときはちょうど、教会の真向かいの2階建ての建物で働いていました。

ここ6年ほど夏になると教会では、オープンチャーチと言って、近所の子供達に教会を開放して、夏休みの宿題を教会ですて、教会

の前に出したビニールプールで水遊びをしたり、聖書の紙芝居をするような行事をしています。聖隷クリストファー大学のこども教育福祉学科の学生や、リハビリテーション学部が実習やボランティアで、子供の勉強を見てくれたりしています。

教会と関わりがなかった大学生たちが、聖隷クリストファー大学に来ることによって、礼拝に参加したり、教会で近所の子供達に勉強を教えることになったりと、いろいろな形で学生たちが関わりをもっているのを見ることができるようになりました。また、クリスマスなどの時期には、大学生たちとキャロリングをして周囲の聖隷施設を讃美歌を歌ってまわるなど、教会行事と職場がつながっていることは感謝なことだと思います。

聖隷クリストファー大学のキャンパス中心の中庭には、キリスト教センターと言う小さな建物があります。私が大学に所属していたとき、仕事帰りにキリスト教センターに寄って讃美歌を歌ったり、聖書を学んだりする大学生のサークルに参加していた時期がありました。初めて参加したときに、自分自身が若い学生のころ、聖書に出会ったときのことを思い出すような新鮮な気持ちになりました。とても純粋な信仰を持っており、そのサークルに参加して職員とし



て何かするというよりは、学生からエネルギーをもらってこちらが元気にさせてもらうような気持ちでした。

サークルに参加していた学生たちの多くは、通っていた高校がミッションスクールであったり、聖書の理念に基づいた全寮制の学校であったりしましたが、本当に信仰を持ち洗礼を受けるようになったのは、大学生になってからでした。親元を離れて、独りで生活するようになり自分自身を見つめることができるようになる年齢なのかもしれません。私は今聖隷クリストファー高校に務めていますが、高校では毎日礼拝が行われます。讃美歌を歌い、聖書のみ言葉を聞くことによって撒かれた種は、生徒によっては、先ほどのサークルの子たちのように、大学生、社会人になったときに芽を出すかもしれない子がいるのではないかと思います。

事務職員は教育現場に立つことではありませんので、生徒と深く関わることはありませんが、中学、高校と多感な時期で、色々な問題を抱えている生徒がおり、生徒指導に奮闘している先生方の苦勞も耳に入ってきます。毎日の礼拝で聴く聖書のみ言葉が心に残り、問題を乗り越える力になればと思います。すぐには芽がでないかもしれませんが、将来何かのきっかけで神様と出会うことがあるかもしれ

れません。事務職員の仕事の中で、生徒の一人一人の成長を見て、その子に働かれる神様の導きを感じることができないのは残念ですが、聖書の理念に基づく学校という職場の中で、神様が共におられ働いておられることを感じるときに本当の喜びがあります。

聖隷学園は小学校が開設されること、こども園から小学校、中学校、高校、大学と一貫して、聖書の教えに基づいた教育がなされます。将来を担う子供たちに神様の導きと祝福が与えられる教育がなされることを喜び勤めていきたいと思っています。

聖隷福祉事業団

在宅・福祉サービス事業部

仲島能矢



私は2016年4月に採用され、聖隷浜松病院の外来医事課という部署に配属されました。今年の4月に現在の部署へ異動となり、在宅・福祉施設で働く方々の給与の計算や、書類の作成、採用者・退職者への各種手続き・案内などの業務を担当しています。

この度の交流会のテーマは「神

と隣人とに仕える私の喜び」とのことです。私が社会人になつてから感じた喜びをお伝えしようと思っていました。昨日、スピーチの原稿を書きながら、とても悩みました。なぜなら、正直に申し上げると、社会人になってから明確に「喜び」を感じたことがありません。この場にふさわしく、それらしいことをいって綺麗に終わりにしようか、正直に「喜び」を感じたことがないと話そうか、とても悩みました。

とは言っても、最初からなんの喜びもビジョンもなく聖隷に入ろうと思ったわけではありません。就職にあたっては、熟考し、徹底的に自己分析・他己分析を行い、最善を尽くして、神様の御心を知ろうとしました。自分は今までどんな能力を神様から預けられてきたのか、どんな性質があるのか、それらを使って神様の望まれるように、喜んで働くには、どこへいけばいいのか。気が狂いそうなほど悩みました。その結果、ひとつ私が見つけた最高に喜びを感じる原点は人の笑顔の理由になることです。私は、身体的・精神的な痛み、障がいといった根本的な笑顔になることを妨げている原因を取り除く仕事に携わること、誰かの笑顔の理由になりたいと考えました。それを仕事にしたいと考えました。

私の祖母が看護学校の教師であったこと、父はリウマチの持病

があり、母は不整脈もちという医療や病院に近い環境で育ったこと、もともとは医者になりたかったこともあり、「保健・医療・介護・福祉等の分野で、できるだけ身体的・精神的な弱さに対して多くの面からアプローチでき、なおかつ、企業の経営理念が神様の方向を向いていて、さらに自分が将来生活するうえで困らないだけの収入が得られること」が全部満たされる企業で仕事ができれば最高だなと思っていました。

これらすべてを満たす企業がありました。そう、聖隷でした。まさに神様の御心だと確信しました。私は遣わされてここに行くんだと。しかし、実際働きはじめてどうなったでしょうか。まず、私を待っていたのは社会的な孤立でした。もともと静岡県にはなんの縁もゆかりもないため、友達はおろか、知り合いもいませんでした。そして、職場の人間関係が特に大きな困難となりました。あまりにも違いすぎる価値観に戸惑い、ほぼ毎日のように否定される恐怖に約2年間恐怖をおぼえ続けました。しかし、神様は逃れの道も用意してくださる、今の部署へと導いてくださいました。優しく頼りになる先輩・上司の皆様を支えられて、今は少しずつ心と体を回復させているところです。

就職して2年が過ぎ、その2年も耐えることで精一杯だったため、



ももとの自分のやりたいこと、ビジョンを見失ってしまいました。社会人3年目を迎えるにあたり、これから自分はどうのように生きていくべきなのか、神様のささやきを聞き取る準備と知恵が必要だと、最近はお考えしています。これから喜びをもって生き、ビジョンをもちながら働けるように変わっていきたくと思っています。最後に、私が苦しみを覚えるときによく祈る、「ヤベツの祈り」をご紹介します。終わりたいと思います。

遠州栄光教会

主任牧師 山本克三



遠州栄光教会にとってと言うだけでなく、一般的に、キリスト教会における「喜び」とは何か、と聞かれた場合、それは他でもありません、救いの喜び・救われた喜びです。私たちキリスト者は、自分の罪と悲惨さから救われることを、イエス・キリストの父なる神に願い求め、待ち望んでいました。その救いが与えられたことを、私たちキリスト者（クリスチャン）は喜んでいいます。

ただし、ここで注意しておくべきことがあります。それは、私たちの救いの喜びとは、神の喜びの反映・神の喜びのこだまのようなものだ、ということなのです。そして、神御自身の大きな喜びの中にあって・神の限りのない大きな喜びに基づいて、私たちの喜びがある、ということなのです（失われた者を捜し出して、御自身の御許に帰らせることを、神は大きな喜びとなさっています。このことは、『ルカによる福音書』15章1-7節に記されている「見失った羊」のたとえに表されています）。

神は私たちを救うことによって、私たちに對する御自身の御心を実現してくださいました。ですから、私たちが救われたということは、神の愛が成就したということでもあります。神は、御自身の愛が成就したことをお喜びになります。私たちの喜びよりも先に、神の愛・神の喜びがあります。そして、その神の愛に生かされて・神の愛を根拠として生きるところにこそ、私たちキリスト者の喜びがあるのです。

ところで、主イエス・キリストは、私たちが「まことの人間」として生きるべき喜びの道を、聖書の中で教えてくださいました。それは、神が与えてくださった「律法」と呼ばれる掟です。この神の定め・愛の戒めとして要約なさ

いました。主イエスは『マルコによる福音書』12章29-31節で、神の律法を次のようにまとめられています。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたに神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

私たちが「まことの人間」として生きるべき道を示す神の律法は、神の定めが教えているのは、神を愛し、自分を愛する、自分を愛するように隣人を愛することだ。そのように、主イエス・キリストは教えてくださったのです。すなわち、神と自分自身と隣人との関わりを、愛をもって正しく整えるべきであって、そのように生きることこそが、私たち人間の歩むべき道である、ということなのです。

神を愛し尊び、自分自身を神に造られたものとして愛し、大切に、さらに自分のように隣人を愛する真実の愛の心に生きる時、私たちは「まことの人間」として生きていくのだ、と言えます。主イエス・キリストによって救われ、神の子とされた者たちは、喜びをもって「まことの人間」として、そうした愛に生きることができるといえます。しかし、主イエスに救っていた

だくまで、私たちはその喜びを失ったままでした。私たちは神を愛することもなく、自分を大切にすることもできず、隣人を愛する真実の愛の心も失ったままでした。

しかし、キリスト教が教えているのは、私たち人間には愛が少ない・愛が足りないということではありません。隣人を思いやる心が足りないから、もっと努力して他人のことに気を配るようにしなさい。そのように、「愛そのものは人間にあるが、その量が足りない」ということを教えているのではないのです。

聖書が教えているのは、私たちは生まれつき、神と隣人とを憎む傾向にある、ということなのです。私たち人間は、神と隣人とを憎むことしかできないように生まれてきたのです。

神の律法に照らせば、愛していないということ、相手をも愛していないこと、愛していても中間地帯は存在しません。私たちの評価では、「神と隣人を十分に愛していない」となるかもしれませぬ。しかし、神の律法から判断すれば、その同じ事態が「神と隣人とを憎んでいる」ということにならぬのです。

私たちは自分の惨めさを、自分自身で知ることができません。私たちが自分の惨めさを思い知るのには、主イエス・キリストが教えてく



ださった神の律法に愛の掟によつてです。主イエスがお示しになつた愛の掟に照らすと、私たちが愛を失っていることは明らかだからです。私たちは真実に生きる喜びを見失ひ、むしろ、自分の惨めさに生きています。そのことが、神の律法によつて明らかに示されるのです。

神の愛の定めを背いており、愛に生きることができないという私たちの罪。この罪こそが、私たちの惨めさの原因です。私たちの罪が、私たち自身を惨めにしていたのです。

私たちは愛に生きるように神によつて造られたにもかかわらず、愛を捨ててしまいました。愛を捨てて、自分自身をも捨てました。その結果、神から見失われ、隣人からも見失われる存在となつてしまつたのです。私たちは罪を犯し、真実の人間性を失つてしまつたのです。

私たちは罪を犯し、愛を捨てたことによつて、神からも隣人からも失われた存在になつてしまいました。しかし、こうした状態にあつても、私たちは何をどうすればよいのかも分かりません。また、そのために私たち自身は何もできません。私たちは自分では、自らの悲惨から逃れることができないのです。

ところが、私たちのような失われた存在を探し求めて、御自身の

御許に連れ戻すために、父なる神は御子イエスを私たちの所へとお遣わしになりました。そして主イエスが私たちを見つけ、私たちが招いてくださいました。主イエスの招きの声を聞いて、私たちは神の御許に帰ります。私たちは心から自分の罪を悲しみ、悔い改めて、父なる神の御許に帰るのです。

先ほど触れましたが、『ルカによる福音書』15章で主イエスがお語りになつた「見失つた羊」のたとえが教えているのは、失われた者を捜し出して御自身の御許に帰らせることこそが、神御自身の喜びだ、ということなのです。しかも、その喜びは非常に大きい、ということです。

私たちが神の御許に帰ることを、神が非常に大きな喜びとなさっている。私たちが神の御許に帰る時、神は大いに喜んでくださる。ここに、神の私たちへの大きな愛が示されています。

私たちが神の御許に帰る前から、神は私たちが愛してくださつていました。ですから、私たちが神の御許に立ち帰るといふことは、私たちが御自身の御許に招くといふ神の御心が実現したことなのです。つまりここに、神の愛は成就したと言えらるのです。ですから、神の喜びは、愛の成就の喜びでもあるのです。

私たちキリスト者は毎週日曜日、教会で礼拝をしています。私たち

が神を礼拝できることの根拠は何か。教会で礼拝が成立する根拠とは何なのか。こうした問いに対し、私たちは、神の喜びこそがその根拠である、と答えなければなりません。神は、私たちが罪と悲惨の中から救うことを喜びとしてくださいました。神は喜んで、私たちを救ひ、キリストのものとしてくださいました。キリストに属する者キリスト者としてくださったのです。

ですから、キリスト者たちが教会に集まり、神を礼拝する・神があがめるといふことは、神の喜びなくしては絶対にはあり得ません。神が私たちが救うことを喜んでくださった。私たちが喜んで救ってくださいました。だからこそ、私たちがキリスト者は、神の喜びに應えて、礼拝するのです。神の喜びの中で神をほめたたえるのです。神の喜びの中で、神に感謝を捧げるのです。

ですから、私たちキリスト者にとりまして、何よりも大きな喜びとは、日曜日に教会に集まつて礼拝することです。礼拝とは、神が喜んでおられることを知っている者たちが、神と共に喜ぶことだ、と言ひ換へることができるかもしれません。

キリスト者とは、神の喜びなくしては、生きていけない者たちです。神の救いなくしては、神の喜びがなければ、私たち人間は失わ

れた者たちだからです。救われていない人間は、まことの人間として生きることはできないからです。私たちキリスト者は、まことの人間として生きている。神によつて、人間性を回復させられた人間として生きている。ですから、教会で礼拝している時、私たち人間は、本来あるべき姿を示しているのです。神を礼拝する時、私たちは最も人間らしく生きているのです。

私たちが捜し求め、愛してやまないお方、神の御子であるイエス・キリストは、御自身の死と復活によつて、まさにその命によつて、私たちが真実の平安と希望に生きる者としてくださいました。私たち教会に集うキリスト者の喜び、そして誇りとは、イエス・キリストを通して私たちに示された、神の愛に生きること。いや、神の愛に生かされることに尽きるのです。

聖隷グループ情報コーナー

山浦光子姉妹追悼

山浦光子姉妹が10月13日に第2アドナイ館において天に召されました。享年99。市川一二三姉妹(故人)とともに浜松ディアコニック(故人)とともに、十字の園、ニッセ志願者となり、十字の園、おおぞらの家での奉仕に一生を捧げました。



聖書のことば

「命と向かい合う」

マタイによる福音書第二章十六〜十八節

学校法人聖隷学園 宗教主任 永井英司

御子イエス・キリストの降誕に続いて、教会暦で言う公現日（異邦の人々に公現なされた日 Epiphany）の時を過（す）しています。

クリスマスの喜びの陰で、ヘロデ王は密かに嬰兒イエスを亡き者にしようとして、ベツレヘム地域の二歳以下の男児虐殺を行ったことが聖書に記されています。

今日においても、世界の紛争地域で多くの子供たちが犠牲になっていることが報じられており、心痛を禁じ得ません。また、食料不足から命を落す子供たちが大勢いることも忘れることはできません。

歴史のページを開くと、為政者によって無抵抗の人々が一方的に迫害された事実が目に入ってきました。第二次世界大戦下で、ナチスドイツが行ったあのホロコースト（大虐殺）を思い起こします。

1938年の末または9年の年初め、ライプツィヒで生まれた障害を持つ子の父親が、自分の子を「殺す許可をヒトラーに求めた」ところが『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』の中で述べられています。

「クナウアー事件」と呼ばれるこ

の出来事は、世界を震撼させたホロコーストの重大事に比べれば小さな事案でしかないように映ります。しかし、決して看過することのできない重大事案を引き起こす要因となっていくのでした。

一人の父親が取った行動が、重度の障害をもって生まれてきた子供や治癒の見込みのない精神障害者などに対する大規模な「安楽死」を断行するきっかけとなっていたことを歴史は証言しています。

一つの命を前にして人間がどのように関わるのか、命に向かい合う人間の在り方によって、世界の歴史は変わるように思えてなりません。

聖隷の源流に遡る時、一人の青年の命に向かい合った先達の働きが今も色褪（あ）せることなく、私たちの心を照らしてくれています。また、命に向かい合う模範は、ご自身の命を賭して示された御子イエス・キリストにあることを証してくれています。

今を生きる私たちも、「行って、あなたも同じようにしなさい。ルカによる福音書一〇・三七」という主イエスのみ言を聴きながら、歩みを進めて行きたいと願います。

インド聖隷希望の家



6月の新学期を前に学用品がなくて学校に行けない子供たちに、寄付により揃えた通学キットを手渡す希望の家のアブラハム代表。

遠州栄光教会

本年4月のオープンを目指して聖隷厚生園南側に学生寮「静聴寮」を建設中です。工事期間中、三方原地区の皆様には御迷惑をおかけしますが、御理解と御協力をよろしく願います。

昨年12月9日には、三方原会堂で入門講座「ウインスター・カフェ」を開催しました。新しく教会に足を踏み入れる方々のために、これからも様々な取り組みをしていきたいと考えています。

小羊学園

昨年4月に「浜松市障がい者基幹相談支援センター」が発足し、5法人共同事業の中心となり聖隷福祉事業団、天竜厚生会などとともに、障がい者の相談、支援にあたっています。特に親亡き後の支援体制づくり等を課題としています。

神戸聖隷福祉事業団

第三期中期計画が進行中です。計画のひとつに「理念浸透の試み」を掲げ、全施設への年間聖句の掲示、理念講演会、理念研修、他法

人訪問理念研修、海外研修、理念ハンドブックの作成・配布、協力牧師懇談会等を実施しています。

十字の園

2年後の60周年に向けて浜松地区では各施設での取り組みを集約して新たな取り組みを、伊豆地区では進行する少子高齢化への取り組みを行うにあたり、ハニ・ウォルフ姉妹の奉仕とその伝統をどのように伝えていくか、原点に戻ったあゆみをしていきます。

牧ノ原やまばと学園

吉田町に「レタスクラブ」という、心を病む人や引きこもりの人がぶらりと訪れ、のんびり過ごす事業所があり、年に1〜3回ほど、吉田町の海岸清掃をしてきました。その活動が認められ、昨年、国土交通省・中部地方整備局 静岡国道事務所から表彰されました。

聖隷学園

2020年4月の小学校設置が認可されました。大学では2019年4月、社会福祉学部こども教育福祉学科に小学校教諭教職課程を開設、リハビリテーション学部国際リハビリテーションコースを立ち上げます。

聖隷福祉事業団

在宅・福祉サービス部ではイタリアへのモンテッソーリ教育研修、ノルウェーへの介護研修を実施しました。4月から浜松市の街中に小規模保育所「聖隷のあ保育園」がオープンします。障がい者分野では、4月から指定管理者として静岡県立浜松学園の運営を引き継ぐことになりました。



長谷川保聖書研究

『マタイによる福音書第五章四三〜四八節』
「敵を愛しなさい」

「隣人を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、あなたがたが聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」

さあ、敵を愛することができるところかということ。ここに書いてありますのは、アガペーという愛です。ここに書いてある通り、敵を愛するという愛です。このアガペーというのは、意思を非常に強く含む愛です。愛する価値のない者をも愛するという愛。敵を愛し、罪人をも、敵をも愛し、愛する価値のない者をも愛していく。それは何故？神が私どもを愛したから。イエス・キリストによって神が私たちを愛したからですね。「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」これはできませんよ。これはもちろん、普通の者にはできません。私に非常に敵意を持つてくる人のために祈りなさい。

「こうして、天に在すあなたがたの父の子となるためである。天の父は悪い者の上にも良い者の上にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

神の子というのは、そうならなければいけないということです。

これは私どもキリスト者にとりましては、まったく弁解も言い訳も余地がないわけです。イエス・キリストがこのような愚かな者のために十字架について命を捨てて、私どもの罪を負って、私どもを父なる神の子としてくださった。それなら私どももまた、敵に対し、わたしどもを迫害する者のためにもそれをしなければならぬ。これがクリスチャンの道徳の根本になるところです。あなたがたの父、イエス・キリストにおいて、私どもも神が父となり給うた。その子となるためである。私どもが父なる神の子である。イエス・キリストにおいて、神の子であると言わなければならない。もしそれができないならば、私どもは神の子と言わねばいけません。

「あなたがたが、自分を愛する者を愛したからとて、何の報いがあるのか。そのようなことは、取税人でもするではないか。」

売国奴ですね、取税人と訳してあるのは売国奴です。売国奴でもそんなことをしない。「兄弟たちに挨拶したからとて、何の優れたことをしているであろうか。」クリスチャンであるならばそのようなことでは駄目だ。クリスチャンというのは、神の子というのは、そんなものじゃない。「そのようなことは、異邦人でもしているではないか。」外国人だっている。クリ

スチャンでない者でも皆、している。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

この「完全な」というのは、簡単に、大人、成人、神の子の大人になるということ。完全に立派な者になりなさい。私どものクリスチャンとしての目標は、この完全に立派な者になるということ。主が我々のために命を捨て給うたということ。主の十字架を絶えず見つめて、この十字架を絶えず見つめて、このように者になるということ。完全に立派な者になるということ。クリスチャンとしての人格の円熟の極みに達する。神の子、天の父の全き子というものになるのが、私どもの目標であるということ。

イエス・キリストの十字架の罪の赦しというものを私どもが忘れたい。絶対的にこのようなことはできない。主が我々のために命を捨て給うたということ、そのことを知って私どもは新たな者になる。私どもの考え方の根本を変える。深く悔い改める。それは、イエス・キリストの十字架を見つめるときだけできるということです。

覚えておくべきことは、先ほど

の、右の頬を打つならほかをも向けてやれという言葉。あくまで主體的に、人格的に生き抜きなさいということ。決して、クリスチャンは骨なしの人間になるということではない。ここから世界を良くしていこう、虐げられている者を助けようという者が出てくれば、病気の中に苦しんでいる人々を助けていくという者も出てくる。そういう主體的な人格的な行動をする。そのためには決して暴力を使わない。悪しき者に手向かうな。暴力をもつて抵抗するな。しかし、人格的な尊厳というものは、あくまで主張しろ。だから非暴力の抵抗を断固としてしなければならぬ、悪に対しては。

そのところをよく間違うものから、クリスチャンが骨無しになつてしまふ。何もできないような人になつてしまふ。今回のところは初めから終わりまで、あくまで人格の尊厳ということを主張し、それを立て、そしてその極限は、敵をも愛するということです。それは天の父の子になること、全き、完全なる子になることなのです。

「長谷川保聖書研究

『マタイによる福音書』

三月に発刊予定です。お問合せは聖隷歴史資料館まで電話又はメールで。

(A4判432頁予定頒布価500円)